

あきる野の山でも「ツキノワグマ」が活動を始めました。

これから山に入る方は、十分に気を付けて、自然を楽しんでください。

《クマ剥ぎ》

あきる野の山でも、越冬(冬眠)を終えたクマが森で活動し始めました。

クマは十分な食料が無い春に「クマ剥ぎ」を行います。これは、主に針葉樹の外皮を爪で剥ぎ取り、内部の形成層(生きている細胞)を爪や前歯で剥ぎ取り食べる行為です。下の写真では前歯で掻き取った痕が見られます。



上の写真では前歯で木部を含めて掻き取っているのが分かります。このクマ剥ぎは120cm位まで歯の痕が確認できるため、後ろ足で立ち上がった大きさがこのくらいだと推定できます。

意外と小さいと思われるかもしれませんが、一般的な成獣の大きさだと思われます。

上の写真のクマ剥ぎで、特徴なのは大きなクマ剥ぎと、左下の写真のような小さなクマ剥ぎがあることです。大きなクマ剥ぎの歯形跡は120cmで、小さいクマ剥ぎは60cmと半分の大きさになっています。

親子のクマが近辺に生息している証拠です。どのクマ剥ぎもまだ白く、直近の物だと思います。これが古くなると、右下の写真のように形成層が酸化して茶色くなります。

《何故、クマ剥ぎをするのか?》

ナイフで削って食べてみると、非常に渋い味がしますが、この時期の形成層は冬に樹体内部の水分凍結を防ぐために樹体内部の糖度をあげているので、ごくわずかに甘みを感じます

この糖分がクマのエネルギー?



《親子のクマ剥ぎ》

下の写真では母グマがクマ剥ぎをしているすぐわきで、小グマがまねしているのか、小さな爪痕が樹皮についています。

採食行動として母グマが子グマに教えますが、スギの大径木でクマ剥ぎを教わった子グマは成長してもスギの大径木でクマ剥ぎをされると言われます。同様にヒノキで教わったクマはヒノキでクマ剥ぎをするそうです。母系で伝わるクマの文化と言えます。

昔からあきる野に住むクマはスギでクマ剥ぎをしますが、最近はヒノキを嗜好するクマも増えてきました。



母グマの大きなクマ剥ぎと比べて、やはり左の写真のような子グマのクマ剥ぎは迫力に欠けます。

右の写真では形成層の掻き取りも浅く、爪痕も小さくなっています。

《クマ剥ぎの不思議》

クマ剥ぎは不思議な採食行動で、樹木の外皮を剥ぐ運動量と形成層を掻き取って得られるエネルギーを比べると、マイナスになることから、エネルギーを得るための行動ではなく、嗜好行動とも言われます。

しかし、この時期のクマ糞には、樹木の繊維が大量に混じっていることから、食べていることは確かです。



山でクマ剥ぎを目にした時は、近くにクマが潜んでいる可能性がありますので、速やかにその場を立ち去ってください。